

ローカルとグローバルをつなぐ総合学習

—宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校の事例から—

水野正朗*

1. 研究の目的

1-1 研究対象

本研究は、宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校の教育課程を対象とし、特に総合的な学習の時間を中心に検討する。宮崎県五ヶ瀬中等学校は、1994年に創設された全寮制の中高一貫校である。学校教育法の改正により、1999年に中等教育学校を設置できることになったため、五ヶ瀬中学校・五ヶ瀬高等学校を合併して中等教育学校に校種変更した。同校は創設当初から「フォレストピア学習」と名付けられた総合学習を特色としている。2014年、文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されたことを受けて、「フォレストピア学習」は「グローバルフォレストピア学習」に発展した。この取り組みは「ローカルとグローバルをつなぐ総合学習」としての特質を有している。

1-2 教職課程コアカリキュラム「総合的な学習の時間の指導法」との関連性

「総合的な学習の時間の指導法」の教職課程コアカリキュラムに示された全体目標は、「総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す。各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成および具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける」である。

教職課程履修学生を対象とした「総合的な学習の時間の指導法」の授業において、教職課程コアカリキュラムに示された「総合的な学習の時間の指導法」の全体目標と下位目標（一般目標・到達目標）を達成するためには、「目標を実現するにふさわしい探究課題」及び「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」について、教職課程の学生が具体的に理解する必要がある。したがって、このような趣旨に添った形で探究課題を組織的に扱っている特色ある教育実践を、教職課程の授業のなかで取り上げて事例検討することは有益な学習活動になる。

宮崎県五ヶ瀬中等教育学校の総合学習「フォレストピア学習」「グローバルフォレストピア学習」の事例研究にあたっては、教職課程コアカリキュラムの一般目標にしたがって、「(1) 総合的な学習の時間の意義や、各学校において目標及び内容を定める際の考え方を理解する」、「(2) 総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける」、「(3) 総合的な学習の時間の指導と評価の考え方および実践上の留意点を理解する」の3つを主な検討観点とする。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部准教授

1-3 総合的な学習における「ローカルな学び」と「グローバルな学び」の意義

現代は著しいグローバル化の時代である。新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の提唱は、グローバル化のもとで到来する知識基盤社会に対応する意図が込められている。そして、小学校からの大学にいたるまで、コミュニケーションを重視した英語教育を強化するなど、グローバル化に対応する教育が一層推進されようとしている（文部科学省，2018）。

グローバル化は、国家間のへだたり、地理的なへだたりを越えたコミュニケーションによって、私たちに大きな利潤・便益をもたらすが、同時に世界レベルでの過剰な競争と選別を生みだす。そこで、田中（2008）は、グローバル時代においては一般に世界標準化、国際的な学力形成など、「グローバル化順応タイプ」の教育プランが強調されがちであるが、喪われようとしている精神的土台をおぎない、人間をもっとも深いところで支える協同と刷新につながる「グローバル化応答タイプ」の教育プランもまた強調されるべきであると主張している。

また、OECDによるPISA（生徒の学習到達度調査）は、経済のグローバル化とともに世界各国の教育を共通の枠組みに基づいて比較する教育指標としての規範性を強め、国家間の比較と政策借用を通して教育改革を促す道具となっている。このように世界各国の教育に強い影響力をもつようになったPISAに対し、松下（2014）は「PISAリテラシーは、＜内容的知識やポリティクスの視点を捨象し、グローバルに共通すると仮想された機能的リテラシー＞という性格をもつことが浮きぼりになった。ナショナルなレベルでの教育内容の編成にあたっては、捨象されたこれらの部分を取り戻し、能力と知識の関係を再構築する必要がある」と述べ、読み書きの背景知識となる特定の文化の知識や、対象世界をどんな言葉や知識によって意味づけるかをめぐるポリティクスという視点を回復させることにより「PISAリテラシーを飼いならす」ことを提言している。

グローバルかローカルかという二項対立を乗り越え、グローバル化の進展のなかで捨象されがちなローカルな学び（自分が住む国や地域に根付いた学び）を復権させ、それをグローバルな学びに有機的に関連づけていくことは、これからの学び、特に総合的な学習における重要課題の一つとなるだろう。

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は、学校創立以来、地域学習「フォレストピア学びの森」に取り組み、ローカル（地域）な学びを極めることが生徒の主体的な学びの基盤となっている。中山間地域の豊かな自然のなかでローカルな学びを体験的・探究的に行う。地域風土に根付いた学習体験（地域の問題発見と解決）が、グローバルな視点で世界的な課題を探究することの基盤となる。ここにおいてローカルとグローバルは対立関係ではなく、往還的な関係または発展的な相互関係として捉えられている。地に足をつけたローカルな学びが、グローバルな学びの展開を可能にしている。

2. ローカルとグローバルをつなぐ総合学習

2-1 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校の概要

宮崎県と熊本県とが接する県境に近い山間部、宮崎県五ヶ瀬町に宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校がある。五ヶ瀬町は、九州のほぼ中央、宮崎県の北西部にあり、東部は高千穂町、南部は椎葉村、北部から西部は熊本県に接している。南西部から南部、南東部にかけては標高1,200メートルから1,600メートル級の山々が連なる一方で、北西部には阿蘇の山々を展望できるなだらかな丘陵地帯が広がっている。町の総面積は171.73キロ平方メートルで、一般的に地形は急峻で約88%を森林が占めている。町の主要産業は農林業であり、かつて約5,800人あった人口は徐々に減り続け、2018年9月現在の人口は3,915人となっている。

五ヶ瀬中等教育学校は1994年に創設された中高一貫の6年制の学校で、男女共学、全寮制、各学年1クラス40人の少人数教育を実施している。1998年の学校教育法改正で中等教育学校（中高一貫教育）が制度

化されることに伴って、1999年に中等教育学校に校種変更した。日本の公立学校としては希有な取り組みである。「中高一貫は五ヶ瀬の一要素でしかない。フォレストピア学習や全寮制などの方が今後本校の大きな特色となるだろう」(p.30)。これは開校3年目(1996年時)の教務主任の言葉である(川上, 2010)。総合的な学習の時間が制度化されたのは2002年であるが、「フォレストピア学習」と名付けられた同校の総合学習は学校創設理念と一体化した形で1994年からスタートしている。

2-2 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校開校時からの歩み

2010年に五ヶ瀬中等教育学校後期課程教頭であった川上浩は、学校開校時からの歩みをまとめている(川上, 2010)。その記述を参考に五ヶ瀬中等教育学校の主な動向をまとめる(表1)。

表1 宮崎県五ヶ瀬中等教育学校開校時からの歩み

昭和62年 (1987年)	21世紀へ向けての宮崎県の施策として打ち出された、県北の五町村をモデル圏域とした「フォレストピア(森林理想郷)」構想の中の「学びの森ゾーン」の中核として、平成元年に全寮制の中高一貫校の新設が発表される。
平成6年 (1994年)	宮崎県立五ヶ瀬中学校・五ヶ瀬高等学校開校。中高各1クラス・82名の新入生。文部省は「中高連携」を研究課題とする研究開発学校として対応する。 文部省研究開発学校(平成6～8年度)の指定を受ける。
平成9年 (1997年)	第1回五ヶ瀬高等学校卒業式を挙行(高校42名)。 文部省研究開発学校(平成9～11年度)の指定を受ける。(平成12～14年度も文部省研究開発学校の指定を受ける。)
平成11年 (1999年)	学校教育法の改正に伴い、宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に校種変更し、五ヶ瀬中学校1期生が中等教育学校6年生となり、中等教育学校1期生として卒業する。
平成14年 (2002年)	学習指導要領改訂にともない、平成14年小中学校において、平成15年高等学校において総合的な学習の時間が新設される。
平成26年 (2014年)	宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校が、スーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定される。

宮崎県は1987年に、21世紀を拓くリーディング・プロジェクトの1つとしてフォレストピア宮崎構想を発表した。「フォレストピア」とはフォレスト(森林)とユートピア(理想郷)をあわせてつくられた造語で、人々が森林の恵みを上手に利用して、いきいきと心豊かな生活ができる場所、「森林理想郷」を意味する。フォレストピア宮崎構想とは、県北西部の高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村、椎葉村の3町2村をモデル圏域(フォレストピア圏域)にし、森林の持つ様々な機能と山村固有の伝統的な生活文化を活かした交流及び施設設備を目指すなど、新しい山村を創ろうとするものであり、「すこやかなの森」、「学びの森」、「体験の森」の3つの森林ゾーンからなる「人間性回復の森林」の整備を進めてきた。その「学びの森」の中核として五ヶ瀬町に平成6年、全国最初の公立中高一貫教育校の宮崎県立五ヶ瀬中学校、宮崎県立五ヶ瀬高等学校が設立された。

その後、学校教育法の一部改正により、1999年、全国最初の中等教育学校、現在の「フォレストピア学びの森 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校」に校名を変更した。1学年40名の全寮制。1学年から3学年までを前期課程、4学年から6学年までを後期課程とし、高等学校に相当する後期課程は全日制普通科であり、6年間を見通した教育活動を展開している。五ヶ瀬町の恵まれた自然の中で感性を磨き、生徒一人一人の個性を開発する教育を通して、眼(まなこ)を世界に開き、未来を切り拓く、創造性豊かで主体的に生きる人間の育成を目指す感動と感性の教育を推進している(宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校, 2018)。

2-3 五ヶ瀬中等教育学校を特徴づけた「フォレストピア学習」

前述したように、同校を特徴づける教育の柱の一つが、学校創設と同時に開始された探究活動「フォレストピア学習」である。その狙いについて、川上（2010）は次のように述べている。

「壮大な実験」による「待ち」の教育

文部省（当時）との協議を重ね、初期投資約60億円をかけて出発した本校が目指したのは、恵まれた自然の中での感動と感性の教育であり、その実践によって生徒の知性と個性の伸長を図り、21世紀社会で活躍する人材を育成することである。開校当初示された「ヤマメ釣りのできる東大生」という生徒像は、「本来の教育」と「受験教育」という二元論的論調からの脱皮を目指したものであったが、最も大きなねらいは、教科内容の重複の多い中学と高校の連結による「ゆとり」を生かし、生徒が理解し、やる気を出すまでじっくり待つ「待ちの教育の実践」であった。

教科内容の削減を「ゆとり」と捉える考えとは一線を画す一方で、協調性と自立心を育む寮生活と地域体験や探究活動を通して自らの経験・体験から課題を起こし、課題について考え抜く力を鍛錬する「フォレストピア学習」を設定した。それは公立の中高一貫校の必要性が、中央教育審議会の「四六答申」や臨時教育審議答申等で繰り返し提案されながら実現できなかったジレンマをどう乗り越えるかの挑戦だったとも言えよう。

前述した「四六答申」の中の「中高一貫校における特色ある教育の展開」で示された展開例のa～gのほとんどに関わる形で本校の教育が実践されてきた点にもそれは表れている。また、中高一貫の「ゆとり」を生かした「フォレストピア学習」の研究と実践は、現行学習指導要領における「総合的な学習の時間」の本格導入において一定の役割を果たしたと考えている。

フォレストピア学習が、「恵まれた自然の中での感動と感性の教育であり、その実践によって生徒の知性と個性の伸長を図り、21世紀社会で活躍する人材を育成する」という学校創立の理念のもとで開始されたことが分かる。学校が位置する中山間地域の特色を生かした「フォレストピア学習」は、1年生と2年生で地域に根ざしたローカルな体験をし、3年生で体験から生まれて疑問をもとに課題研究をしてレポートにまとめる。そして、4年生になると「森林文化」「環境科学」「数理工学」等の分野で課題研究を取り組む。さらに、5年生・6年生では研究をもとに論文やプレゼンテーションを作成し、研究成果を公開するシンポジウムや公開講座を行う。同校の取り組みは、2002年からの「総合的な学習の時間」の実施を先取りして、総合学習の意義を示した先進的なものであった。

2-4 「グローバルフォレストピア学習」の目標とカリキュラム

五ヶ瀬中等教育学校が、2014年度に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されたことを受けて、従来の「フォレストピア学習」は、ローカル（中山間地域）からグローバル（国際社会）で活躍できる「野性味あふれるグローバル・リーダー」を育成するための学習プログラム「グローバルフォレストピア学習」として再編された（図1）。五ヶ瀬中等教育学校（2018）が編纂した『スーパーグローバルハイスクール研究開発実施報告書（4年次）』をもとに、「グローバルフォレストピア学習」の目標と内容を検討する。

五ヶ瀬中等教育学校スーパーグローバルハイスクールの「目的」は、「中山間地域から、顕在化しているグローバルな社会課題に関心を持ち、深い教養やコミュニケーション能力、問題解決力等を身につけ、地方から国際社会で活躍できる『野性味あふれるグローバル・リーダー』を育成する」である。

「事業概要」では「本校は全国初の公立中等教育学校である特徴（6カ年教育・少人数教育・全寮制教育）と、国際社会で議論されている課題が山積している中山間地域にある強みを活かし、国内だけではなく、海外（特に新興国）を舞台に、大学、企業、NPO法人、国際機関等と連携を図りながら、課題研究を軸とした『野性味あふれるグローバル・リーダー』を育成するためのカリキュラムの開発・実践や、その体制整備を進める」としている。

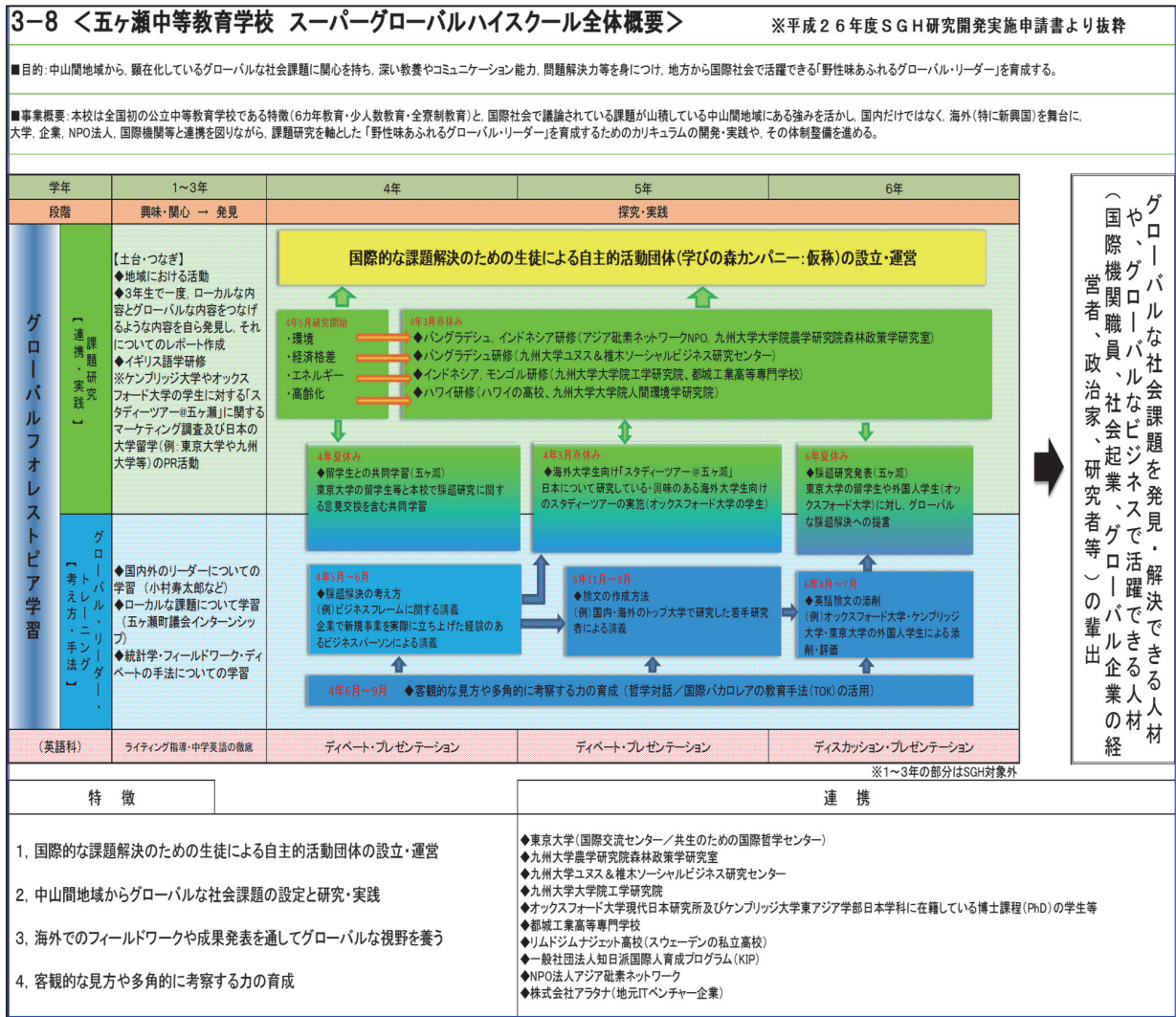


図1 五ヶ瀬中等教育学校 スーパーグローバルハイスクール全体概要

前期課程1学年～3学年は「興味・関心→発見」の段階とされている。課題研究【連携・実践】では「土台・つなぎ」として「地域における活動」を進め、「3年生で一度、ローカルな内容とグローバルな内容をつなげるような内容を自ら発見し、それについてのレポート作成する」活動を行う。さらに「イギリス語学研修」において、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学の学生に対する「スタディーツアー@五ヶ瀬」に関するマーケティング調査及び日本の大学留学(例: 東京大学や九州大学等)のPR活動を計画している。また、グローバル・リーダー・トレーニング【考え方・手法】として、「国内外のリーダーについての学習」「ローカルな課題について学習(五ヶ瀬町議会インターンシップ)」「統計学・フィールドワーク・ディベートの手法についての学習」が実施される。

後期課程4学年～6学年は「探究・実践」の段階とされる。国際的な課題解決のための課題研究が開始され(4学年)、論文作成・スタディーツアー(5学年)、英語論文作成と活削・課題研究発表会(6学年)が行われる。

以上、「グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、グローバルなビジネスで活躍できる人材(国際機関職員、社会起業、グローバル企業の経営者、政治家、研究者等)の輩出」を目指すという、一貫した目標のもとついで、学習活動を段階的に発展させる構想となっている。

では、実際に運用されたカリキュラム(学習活動の内容と配列)はどのようなものであったか。「平成29年度グローバルフォレストピア学習 年間指導カリキュラム表」を以下に示す(図2)。

平成29年度グローバルフォレストピア学習 年間指導カリキュラム表

学年	学期	1日研修												1月		2月		3月		行事
		4月24日 6時間	5月18日 3時間	6月1日 3時間	6月15日 3時間	6月29日 3時間	7月13日 3時間	9月2日 3時間	10月12日 3時間	10月26日 3時間	11月9日 7時間	11月14日 3時間	12月7日 3時間	1月18日 3時間	2月1日 3時間	2月9日 3時間	2月22日 3時間	3月9日 3時間	3月11日 6時間	
1年	ローカル学1	地域の自然と文化を感じる	田植え	用水路(フィールドワーク)	茶摘み	稲刈り ※同日実習の場合あり	カヌー	読書	読書	脱穀	石碓	竹細工	もちつき (6時間)	体験活動のまとめ						夏季休業 イギリス語学研修 研究発表会(本発表) 研究発表会(予発表)
2年	ローカル学2	生命を支える産業を学ぶ	農作物①	農作物②	命のつながり (6時間)	農作物③	農作物④	農作物⑤	農作物⑥ (収穫)	生命と産業 (土旦久研習)	ヤマノの産物	探究活動 (テーマ設定)	探究活動							
3年	グローバル学1	グローバルな視点から学ぶ	国内外のリーダー像を学ぶ ※歴史科	課題研究の進め方を学ぶ (グローバル)	ローカルな課題の実態を知る ※五ヶ瀬町議会	グローバルな社会課題を知る (1)	卒業発表会	グローバルな社会課題を知る ※国語科 ※五ヶ瀬町議会 ※エスプレー	ディベートの手法を学ぶ	統計の手法を学ぶ	グローバルリーダーシッププログラム 5ヶ瀬	課題研究 (課題の把握)		語学研修に向けた準備 課題研究(テーマ設定)						
4年	グローバル学2	課題研究の実践・考え方を学ぶ	先行研究を学ぶ 5年生と合同実施	ビジネスフレームを学ぶ ※国語科 (グローバル)	地域課題の分析手法を学ぶ ※国語科 (宮崎大学)	課題研究(調査)	卒業発表会 の発表	スタディーツアー 5ヶ瀬	哲学科を学ぶ ※国語科 (宮崎大学)	課題研究(調査)	グローバルリーダーシッププログラム 5ヶ瀬	課題研究(分析)		課題研究/カリキュラムの進捗を踏まえた 学術的な考え方(如の議論)を学ぶ ※本発表員 ポスターセッションの準備						
5年	グローバル学3	課題研究の実践・成果をまとめる	先行研究を学ぶ 4年生と合同実施	課題研究(実践)			卒業発表会	課題研究(考察)			論文作成の進め方を学ぶ ※国語科 (グローバル)	日本語論文の作成		日本語論文の作成 プレゼンテーションの作成 英語サマリーの手法を学ぶ ※国語科						
6年	グローバル学4	課題研究の成果を発信する	英語サマリーの作成 ※英語科				夏季休業			英語サマリーの磨き直し	日本語によるディスカッションの手法を学ぶ	日本語によるディスカッションの手法を学ぶ	英語によるディスカッション	英語によるディスカッション ※国語科 (県内ALT)						

図2 平成29年度グローバルフォレストピア学習年間指導カリキュラム表

平成29年度(2017年度)のカリキュラム表(図2)を見ると、1年時は「ローカル学1：地域の自然と文化を感じる」段階であり、田植え、用水路(フィールドワーク)、茶摘み、稲刈り、脱穀、竹細工、もちつき等を含め地域(ローカル)に密着した体験・探究活動を行い、体験学習の成果をまとめ、3月に研究発表会を行う。3月に研究発表を行うことは1年生から5年生まで一貫して行われる。

2年時は「ローカル学2：生命を支える産業を学ぶ」段階であり、1年時の活動を引き継ぎつつ、さまざまな農作業を通しての体験活動に取り組むことを通して命のつながりを知るとともに、テーマを設定したの探究活動を行う。

3年時には、1年時・2年時で育まれた興味関心を土台にして、「グローバル学1：グローバルな視野と手法を学ぶ」ことをテーマにグローバルリーダー・トレーニングが始まる。「国内外のリーダー像を学ぶ(歴史科)」「ローカルな課題の実態を知る(五ヶ瀬町議会)」「グローバルな社会課題を知る(経済格差・高齢化：講師)」「ディベートの手法を学ぶ(国語科)」「統計の手法を学ぶ(数学科)」など盛りだくさんの内容がある。外部講師を活用するとともに各教科が協力することで、子どもたちの探究活動を支えていることが分かる。また3年時にイギリスで語学研修を行うが、現地の大学生向けの発表も組み込まれている。このような学びのなかで、今後の課題研究における課題を把握する。

4年時は「グローバル学2：課題研究の実践・考え方を学ぶ」段階に進み、本格的な課題研究が始まる。夏季休業中に希望者による海外研修がある。それ以外の生徒は海外からのスタディーツアーを受け入れて交流する。1年間かけて研究したあとの3月にポスターセッションを行う。

5年時は「グローバル学3：課題研究の実践・成果をまとめる」段階に至る。ローカル(中山間地域)からグローバル(国際社会)につながる課題研究を実践するとともに、その結果を考察し、日本語論文およびプレゼンテーションを作成し、3月に研究発表する。

最終学年の6年時には「グローバル学4：課題研究の成果を発信する」ことがテーマとなり、研究成果をグローバルに発信する活動を行う。5月に論文の英語サマリーを作成し、イギリスの大学生に英文を送って添削してもらう。また五ヶ瀬町有志を招いての日本語によるディスカッション、さらに県内ALT

を招いての英語によるディスカッションを行う。

以上のように、ローカルとグローバルをつなぐという視点のもと、6年間にわたって多くの学習活動が有機的に関連づけられている。同校の報告書(2018)は、学校全体としての教育目標と教育内容の共有化が進んだことで、組織的な年間指導カリキュラムによって見通しを持って、ローカルとグローバルをつなぐ6年間の探究的な学習が進むように計画することができたと述べている。同校がローカル(地域連携にもとづく体験学習・探究学習)を中心にした「フォレストピア学習」に長年取り組んできたこと、スーパーグローバルハイスクールの指定を機にこれまでの成果と課題を教員間で共有したことが、ローカルとグローバルをつなげてグローバル(和製英語)に学び、グローバルに向けて発信できる教育課程および学習活動を成立させたと言える。

2-5 「グローバルフォレストピア学習」の評価

五ヶ瀬中等教育学校では、6年間の探究活動を通じて子どもたちが身につける力、各学年段階における到達目標が設定され、共有されている。また「スーパーグローバルハイスクール目標設定シート」が作成され、「SGH構想において実現する成果目標」「SGH指定4年目以降に検証する成果目標」「グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標」が設定され、年度ごとの活動成果が可視化され、成果と指導における課題が関係者間で共有できるようになっている。

さらに、五ヶ瀬中等教育学校は、Glocal Competency (GC) をSGHプログラムや日々の教育活動を通して生徒に身につけさせたい力として設定し、SGHプログラムの成果や課題を計る指針の一つとして生徒の変容を測定している。Glocal (グローバル) とはグローバルとローカルをかけあわせた造語である。

Glocal Competencyは、以下の図3・表2が示すように「a.興味・関心・態度、b.課題設定力、c.論理的思考力、d.問題解決力、e.批判的思考力、f.表現・発信力」からなる能力でグローバルな視点をもって地域の社会問題に取り組むことのできる多様な力と定義されている。この力を育成するためには、主にグローバルフォレストピア学習やSGH関連事業(海外研修、オックスフォード・東大PEAKプログラムなど)を基軸にして生徒へ働きかけを行うが、日々の教育課程の目標にもそれぞれの力を育成するための働きかけが含まれており、Glocal Competency をSGHのみで身に付いた力と区別して測定することは非常に難しい。そこで、SGHを通しての生徒の変容について、2014年から全生徒を対象にGlocal Competencyの12項目についてアンケートを実施し、生徒内での自己評価の調査をしている(表2)。また、保護者アンケートや教員アンケートも実施している。

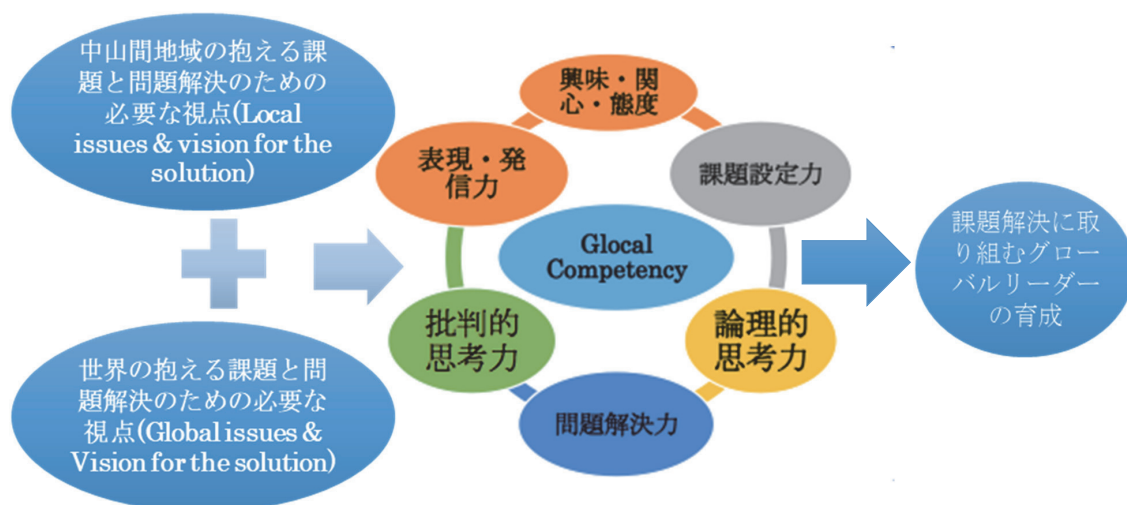


図3 Glocal Competencyの構造

表2 Glocal Competency 12項目

1) 学んだことを課題解決の道具として活用する力 c d	7) もっといろいろなことを学びたい、学び続けたいという姿勢 a
2) 解決が難しい課題に直面した時に対処方法を考え、工夫する力 c d	8) 国籍や文化、世代、性（女性、男性）、考え方の違いといった人の多様性をありのままに受け入れて共に活動しようとする姿勢や態度 a e
3) 他人の話やメディア等で述べられている事柄について批判的に（様々な角度から）聞く姿勢 e	9) 見知らぬ人や土地など未知の環境のなかでも積極的に活動していくことへの自信や姿勢 c e
4) 他人の関心を集める形で、自分の考えを伝えることができる力 a d f	10) 世界に誇れる郷土の良さについての理解 a b c
5) 自分の中に取り組んだ知識を体系化して整理することができる力 c	11) 社会に対して自分が貢献できることは何かを考え行動する姿勢 a b d e
6) 教室内で学んだことと現実社会の社会状況とを結びつけてより深い理解へとつなげていこうとする姿勢や態度 a b c d e	12) 失敗や想定外の事態に直面しても、それらを前向きに捉え、乗り越えていこうとする態度や自信

3. 「総合的な学習の時間の指導法」における学生の学び

五ヶ瀬中等教育学校の「グローバルフォレストピア学習」は、「中山間地域から、顕在化しているグローバルな社会課題に関心を持ち、深い教養やコミュニケーション能力、問題解決力等を身につけ、地方から国際社会で活躍できる『野性味あふれるグローバル・リーダー』を育成する」ことを目標とし、郷土の良さを理解し、地域から世界の課題を発見解決することを通してGlocal Competencyという新しい概念にもとづくコンピテンシー（資質・能力）の育成を目指すという斬新なものである。教職課程の学生が「(1) 総合的な学習の時間の意義や、目標及び内容を定める際の考え方を理解する」ための特色ある学校の実践事例としてふさわしいと考える。

本学学生が、五ヶ瀬中等教育学校の事例研究で学んだ総合学習の方法論（課題発見と解決）を手がかりに、自分の出身地や居住地または本学周辺地域における課題を調査・発見し、その解決策を考えるようにしたい。地域の課題を追求することを通して、日本または世界の課題に見えてくる可能性は高い。また、学生が適切な解決策が見つけれないことは十分にありうるが、我々が住む社会の未解決問題の根深さを認識することにつながるため、それは決して無駄な学習ではない。社会を良くするために、学生自身が「探的な見方・考え方」を働かせ、身近な課題をよりよく解決する体験を通し、自己の生き方をよりよく考えていく資質・能力を伸ばしていく必要がある。

五ヶ瀬中等教育学校の「グローバルフォレストピア学習」の教育課程は、ローカルな学習（地域連携にもとづく体験学習・探究学習）を基盤としてグローバルな社会課題を発見・解決するという全体目標のもとで、各学年の目標と内容が構造化され相互に関連づけられている（図1、図2）。さらに、6年間の探究活動を通じて子どもたちが身につける力、各学年段階における到達目標を設定し、教員間で共有し、グローバルとローカルをつなげた資質・能力Glocal Competencyを、SGHプログラムや日々の教育活動を通して生徒に身につけさせたい力として設定し、SGHプログラムの成果や課題を計る指針の一つとして生徒の変容を測定している（図3、表2）。このような指導計画作成と評価について考え方と評価方法の実際を、教職課程の学生が具体的に学ぶことは、学生たちが「(2) 総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける」「(3) 総合的な学習の時間の指導と評価の考え方および実践上の留意点を理解する」ことを支援するだろう。本学の教職授業「総合的な学習の時間の指導法」で育成を目指す学生の資質・能力として第1に挙げたいのは、人々と共に生き、よりよい社会

を創ることに向かう人間性である。学生自身に1単元分の指導計画と評価方法を立案させ、その成果を相互検討させる演習は、指導計画作成能力と指導力の向上に有効に働くだらう。

残された課題は主に3つある。1つめは、教職課程の学生が探究活動の指導法を具体的にイメージできるようにするために、総合的な学習の時間の目標や実施の枠組み・内容について知るだけでなく、生徒たちの生きた学びの姿を具体的に紹介する必要があることである。2つめは、Global Competencyにもとづく評価の考え方と方法について知ることができたが、その評価が改善にどのように生かされているかまでは明らかにできなかったことである。3つめは、学生が総合的な学習を学ぶのに適した教育実践をさら収集することである。現地調査を含め、教育実践の調査と分析に取り組んでいきたい。

引用文献

五ヶ瀬町公式ウェブサイト <http://www.town.gokase.miyazaki.jp/> (2018年12月情報取得)。

教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017) 『教職課程コアカリキュラム』 文部科学省。

川上 浩 (2010) 「五ヶ瀬中等教育学校のいま」 『月刊高等教育2010年7月号 検証・中高一貫教育校』 学事出版, 30-33頁。

松下佳代 (2014) 「PISAリテラシーを飼いならす：グローバルな機能的なリテラシーとナショナルな教育内容」 『教育学研究』, 81 (2), 150-163頁。

五ヶ瀬中等教育学校 (2018) 『スーパーグローバルハイスクール研究開発実施報告書 (4年次)』 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校。

田中智志編 (2008) 『グローバルな学びへ：協同と刷新の教育』 東信堂。

参考文献

藤崎雅子 (2014) 「日本の高校はグローバル人材を育成できるのか？ SGH指定校の挑戦」 『Career Guidance』 vol403, 33-39頁。

五ヶ瀬中等教育学校公式ウェブサイト <http://gokase-h.com/> (2018年12月情報取得)。

文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総合的な学習の時間編』 東山書房。

田村 学 (2017) 『中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』 明治図書。